

『更級日記』における春秋優劣論——「あさみどり」詠を中心に——

島 本 あ や

一、はじめに

『更級日記』(注1)における春秋優劣論は、長久三年(一〇四二)年の「十月ついたちごろ」(注2)、高倉邸の祐子内親王家において(注3)、源資通によって語り出される。春、秋、冬のそれぞれの季節の夜の月の景をそれぞれに似合う楽器の音と合わせて語る。その中で「冬の夜の、空さへさえわたりいみじきに、雪の降りつもりひかりあひたるに、箏のわななき出でたるは、春秋もみな忘れぬかし」と資通自身は冬の夜の月に心を寄せていることを表明するのである。そして、資通は孝標女や朋輩の女房に問いかける。

「いづれにか御心とどまる」と問ふに、秋の夜に心を寄せてこたへたまふを、さのみ同じさまにはいはいはじとて、

A あさみどり花もひとつに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の月

と答へたれば、かへすがへすうち誦じて、「さは秋の夜はおぼしすてつるななりな。

B 今宵より後の命のもしもあらばさは春の夜をかたみと思

はむ」

といふに、秋に心寄せたる人、

C 人はみな春に心を寄せつめりわれのみや見む秋の夜の月とあるに、

(三三五～三三六頁)

「どの季節に心惹かれるか」との問いに、孝標女の朋輩の女房は秋の夜だと答える。それに対して、孝標女はA歌をもつて、春の夜の月への心寄せを詠む。資通がB歌で春に肩入れすると、C歌で朋輩の女房は秋への心寄せを詠んで応戦する。

資通は冬の夜の月に心を寄せる理由として、斎宮の裳着の勅使として伊勢に下向した際の思い出を語る。そして、この孝標女たちと語った「闇の夜」の「時雨」の日も心に染みるものであり、斎宮の雪の夜に劣らないものだと言ったのであった。この後、後日譚として、次の年の八月、そのまた次の年の春ごろの孝標女と資通のやり取りが語られている。『更級日記』において春秋優劣論が語られる場面を要約すると以上のようになる。

『更級日記』の春秋優劣論は『枕草子』の影響(注4)、『新古今集』収載歌の詞書との比較(注5)など、さまざまな面からす

に研究が行われている。特に、『源氏物語』からの影響は『更級日記』全体と関わるテーマでもあり、先行研究も多い(注6)。しかし、源資通(注7)の発話に二度登場する「ゆゑ」という語、つまり春秋優劣論においてその季節を支持する理由に注目すると、『更級日記』の春秋優劣論が従来指摘されている以上に『源氏物語』と密接に結びついたものであると言えるのではないだろうか。先行研究に導かれつつ、私見を述べていきたい。

なお、『更級日記』は日記文学であり、その研究には史実との照らし合わせが必要だと思われる。しかし、この場面においてはその虚構性がすでに指摘されている。ここでは、史実との照らし合わせは問題とせず、作りこまれた虚構の場面として読んでいく。

二、冬の月——『源氏物語』との類似①——

資通が繰り返し語り支持するのが「冬の月」である。

また、さかと思へば、冬の夜の、空さへさえわたりいみじきに、雪の降りつもりひかりあひたるに、筆筆のわななき出でたるは、春秋もみな忘れぬかし。

(三三五頁)

冬の夜の月は、昔よりすさまじきもののためしにひかれてはべりけるに、またいと寒くなどしてことに見られざりしを、斎宮の御裳着の勅使にて下りしに、暁に上らむとて、日ごろ降りつみたる雪に月のいと明きに、旅の空とさへ思へば、心

ほそくおぼゆるに、まかりまうしに参りたれば、余の所にも似ず、思ひなしさへけおそろしきに、さべき所に召して、円融院の御世より参りたりける人の、いといみじく神さび、古めいたるけはひの、いとよしふかく、昔のふることどもいひ出で、うち泣きなどして、よう調べたる琵琶の御琴をさし出でられたりしは、この世のこととおぼえず、夜の明けなむも惜しう、京のことも思ひたえぬばかりおぼえはべりしよりなむ冬の夜の雪降れる夜は思ひ知られて、火桶などをいだきても、かならず出でてなむ見られはべる。

(三三六～三三七頁)

当該場面は「十月ついたちごろの、いと暗き夜」(注8)であり、季節は冬であった。当座の季節が優るとする春秋優劣論史の流れ(注9)を汲んで、冬を支持するのである。

資通が「冬の月」を支持すること、また「雪の降りつもりひかりあひたる」と雪が月によって光る様子を描くことは、『源氏物語』の影響によるものである。

まず、雪の光について先に確認しておこう(注10)。雪の光は朝顔巻で源氏によって回想されることになる。

雪のいたう降り積もりたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌も光りまさりて見ゆ。「時々につけても、人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの身にしてみて、この世の外のことまで思ひ流され、

かどしさのすすみたまへるや苦しからむ。」

(朝顔②四九一〜四九二頁)

おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。すさまじき例に言ひおきけむ人の心浅さよ」とて、御簾捲き上げさせたまふ。月は隅なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、しをれたる前栽のかげ心苦しう、遣水もいいたうむせびて、池の水もえもいはずすごきに、童べおろして雪まろばしせさせたまふ。

(朝顔②四九〇〜四九一頁)(注11)

雪の夜、紫の上を相手に源氏が語る場面である。ここで、源氏が冬の月への思入れを語っている。この後、源氏による女性評の最初に、次のように藤壺が語られる。

「ひと年、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたることなれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。何のをりをりにつけても、口惜しう飽かずもあるかな。いとけ遠くもてなしたまひて、くはしき御ありさまを見ならしたてまつりしことはなかりしかど、御まじらひのほどに、うしろやすきものには思したりきかし。うち頼みきこえて、とあることかかるをりにつけて、何ごととも聞こえ通ひしに、もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど、言ふかひあり、思ふさまに、はかなき事わざをもしなしたまひしはや。世にまたさばかりのたぐひありなむや。やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたるところの並びなくものしたまひしを、君こそは、さいへど紫のゆゑこよなからずものしたまふめれど、すこしわづらはしき氣添ひて、かど

このことから源氏にとつての雪の光が藤壺を思い出すすがとなつてゐることが知られよう。このような雪の光については、倉田実氏の次のような指摘がある。

「雪の光」は、照らすものとして人物の姿を引き立てて聖性を示していたが、また、先に示唆しておいたように、それ自体の光景は「月」と結びついて、回想をもたらしようである。

「月」自体も過去を照らし出す鏡とされ、回想の具であつたが、「雪の光」と結合してさらに独自の回想性を發揮していくことになる。(注12)

『更級日記』の当該場面に戻つてみれば、冬の月による雪の光が斎宮の雪の夜を思い出すすがとなつてゐる点で、『源氏物語』の雪の光と類似した効果を發揮しているだろう。

さらに、『源氏物語』の若菜下巻には音楽と冬の月、音楽と春秋優劣論を関連させる描写がある。

冬の夜の月は、人に違ひてめでたまふ御心なれば、おもしろき夜の雪の光に、をりにあひたる手ども弾きたまひつつ、さぶらふ人々も、すこしこの方にほのめきたるに、御琴どもとりどりに弾かせて、遊びなどしたまふ。年の暮れつ方は、対などにはいそがしく、こなたかなたの御営みに、おのづから

御覧じ入ることどもあれば、「春のうららかならむ夕などに、いかでこの御琴の音聞かむ」とのたまひわたるに、年返りぬ。

(若菜下④一八三頁)

夜更けゆくけはひ冷やかなり。臥待の月はつかにさし出でたる、「心もとなしや、春の臘月夜よ、秋のあはれ、はた、かうやうなる物の音に、虫の声よりあはせたる、ただならず、こよなく響きそふ心地すかし」とのたまへば、大将の君、「秋の夜の限なき月には、よろづのものとどこほりなきに、琴笛の音も明らかに、澄める心地はしはべれど、なほことさらにつくりあはせたるやうなる空のけしき、花の露もいろいろ目移るひ心散りて、限りこそはべれ。春の空のたどしき霞の間より、朧なる月影に、静かに吹き合はせたるやうには、いかでか。笛の音なども、艶に澄みのぼりはてずなむ。女は春をあはれぶと古き人の言ひおきはべりける、げにさなむはべりける。なつかしくものとのとほことは、春の夕暮こそことにはべりけれ」と申したまへば、「いな、この定めよ。いにしへより人の分きかねたることを、末の世に下れる人のえ明らめはつまじくこそ。物の調べ、曲のものどもはしも、げに律をば次のものにしたるは、さもありかし」などのたまひて、

(若菜下④一九四〜一九五頁)

前者は源氏が女三の宮に琴を教える中で合奏が行われている様子、後者は女楽の後に源氏と夕霧が音楽について論評する場面である。

中嶋朋恵氏は先行する春秋優劣論の用例を並べて検討し、以上のような『源氏物語』の描写を挙げた上で、『更級日記』のこの場面にについては次のように指摘している。

ここでは春秋優劣論の中にはじめから冬が加えられて論じられているのである。

また資通はそれぞれの季節にふさわしい楽器をあげている。この二点ともに、源氏物語の春秋優劣論から冬への展開を受けついでいる。(注13)

このような点から考えられるのは、冬の月・雪の光から斎宮を思い出し、冬の月を賞でる点で、資通が源氏と重ねられる人物として造形されていることだろう。

三、春秋優劣論と斎宮女御——『源氏物語』との類似②——

また、そもそも、春秋優劣論を語りかけることそのものが、資通と源氏を重ねている(注14)。『源氏物語』薄雲巻において、斎宮女御に語りかける場面を見てみよう。源氏は六条御息所のこと、斎宮女御への恋情を語り、その後に春秋優劣論を展開する。

「はかばかしき方の望みはさるものにて、年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心のゆくこともしはべりにしがな。春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人あらしはべりける、そのころのげにと心寄るばかりあらは

なる定めこそはべらざなれ。唐土には、春の花の錦にしくものなしと言ひはべめり、大和言の葉には、秋のあはれをとりたてて思へる、いづれも時々につけて見たまふに、目移りてえこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね。狭き垣根の内なりとも、そのをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたり、秋の草をも堀り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覽ぜさせむと思ひたまふるを、いづ方にか御心寄せはべるべからむ」と聞こえたまふに、

(薄雲②四六一〜四六二頁)

源氏はこのように春秋優劣論を語りかける。ここで、源氏は「秋のあはれ」にこだわる。野宮の別れは、以前にも「あはれ」と語られていた。

あはれ、このころぞかし、野宮のあはれなりしことと思し出でて、あやしう、やうのものと、神恨めしう思さるる御癖の見苦しきぞかし。

(賢木②一二〇頁)

よろづの御物語、書の道のおぼつかなく思さるることどもなど問はせたまひて、またすきずきしき歌語なども、かたみに聞こえかはさせたまふついでに、かの斎宮の下りたまひし日のこと、容貌のかしくおはせしなど語らせたまふに、我もうちとけて、野宮のあはれなりし曙もみな聞こえ出でたまひてけり。

それぞれ、野宮の別れから一年後の秋、賢木巻で朝顔の斎院と歌の贈答をして、野宮の別れを思い出す場面と、源氏が参内して朱雀帝と語らう場面である。繰り返し「あはれ」と野宮の別れは語られており、源氏も野宮の別れの「あはれ」を、秋の「あはれ」とそのものとしているのだろう。源氏はその野宮の別れの「あはれ」と今の秋の「あはれ」を重ねることで、六条御息所と斎宮女御を重ねようとするのではないか(注15)。

『更級日記』に戻って考えてみる。この「斎宮の御裳着の勅使にて下りしに」は史実に基づくものではある(注16)。しかし、春秋優劣論を語りかけることそのものだけでなく、そこに斎宮を媒介とすることもまた、資通に源氏を重ねられる要素なのではないだろうか。

四、桜の花——『更級日記』における春——

一方で、A歌の独自性を主張する論もある。岡部すみれ氏は『更級日記』中の桜の花の用例を分析し、その中で次のように述べている。

孝標女の桜の花への思い入れは、少女時代に乳母を喪ったときの情景が大きく影響しているのだろう。(中略)「あさみどり」の和歌に思いを致すと、資通の織りなす春の風情に導かれながら、孝標女は自分の心に深く根ざした独自の光景を高

らかに謳いあげたのだということが出来る。(注17)

また、A歌においてもさまざまな指摘がされている。川村晃生氏は『源氏物語』須磨巻を引きながら、次のように指摘する。

明けぬれば、夜ふかく出で給ふに、有明の月いとをかし。
花の木ども、やう／＼盛りすぎて、わづかなる木蔭のい
としろき庭に、うすく霧りわたりたる、そこはかとなく
霞みあひて、秋のあはれに、多くたちまされり。

これは源氏が須磨退去に際して、左大臣邸に別れを告げに出向き、同邸を退出する折の文章である。時は三月二十日頃、屋外は有明の春月が、盛りを過ぎた桜の花を照らしながら、薄く霞み合っている。(中略)孝標女の心には、春の情趣を秋のそれと対比せしめた先例として、右の須磨巻の一文が鮮やかに蘇ったと考える余地はあろう。(注18)

確かにそのような表現の類似は認められよう。

このような指摘を受けて、伊藤守幸氏は注の中で次のように指摘している。

『更級日記』には、乳母の死を語る記事に連接する形で、侍従大納言の娘の夭折が記されているが(当時孝標女は、能書家行成の娘の筆跡を書の手本としていた)、『栄花物語』「あさみどり」巻には、幼い行成の娘と藤原長家との結婚が描かれ、十五歳で夭折した行成の娘にとっては生涯の絶唱とも言うべ

き、「浅緑空ものどけき春の日は暮るる久しきものとこそ聞け」という後朝の歌が載せられている。「難遊び」のような新妻の詠んだ歌ということもあって、読む者に強い印象を与え、ついには『栄花物語』の巻名にまで影響を与えたこの歌こそ、「あさみどり」の歌を詠む孝標女が思い浮かべるにふさわしいものだが、ただし、それは、あくまでも「あさみどり」の一句のみにこだわった場合の話である。見ての通り、両歌的内容的異質性は明らかであるし、当該記事の緊密な場面構成に照らして、孝標女は、ここでは光源氏風の問いかけにふさわしい『源氏物語』的な歌を用意することに心を砕いていたと捉えるのが穏当である。(注19)

筆者はこの指摘に肯きつつも、孝標女の桜の花への思い入れと、『源氏物語』的な春秋優劣論は同居しうるものであると考えている。むしろ、孝標女の桜の花への思い入れがあるからこそ、この場面は『源氏物語』的な春秋優劣論の場となるのだ。

五、孝標女の春の思い出

『更級日記』の中には何度か春の記事が見られるが、ここでは孝標女の少女時代、上京したばかりの場面に注目したい。

継母なりし人は、宮仕へせしが下りしなれば、思ひしにあらぬこともなどありて、世の中うらめしげにて、外に渡るとて五つばかりなる児どもなどして、「あはれなりつる心のほど

なむ、忘れむ世あるまじき」などいひて、梅の木の、つま近くて、いと大きなるを、「これが花の咲かむをりは来むよ」といひおきて渡りぬるを、心のうちに恋しくあはれなりと思ひつつ、しのびねをのみ泣きて、その年もかへりぬ。いつしか、梅咲かなむ。来むとありしを、さやあると、目をかけて待ちわたるに、花もみな咲きぬれど、音もせず。思ひわびて花を折りてやる。

頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春はわすれざりけり

といひやりたれば、あはれなることども書いて、

なほ頼め梅のたち枝は契りおかぬ思ひのほかの人も訪ふなり

(二九五〜二九六頁)

まず、上京後すぐに語られるのは、継母との別れである。継母は家を出ていくにあたって、梅の木について「これが花の咲かむをりは来むよ」と言い残して去る。結局、梅の花が咲いても、継母は帰って来なかった。そして孝標女と継母との歌の贈答が語られる。

継母との別れそのものは冬の出来事である。しかし、「これが花の咲かむをりは来むよ」という言葉があることで、梅の花が咲いても継母が帰って来なかった、その春のことに重点が置かれて語られているように感じるのである。

その春、世の中いみじう騒がしうて、松里の渡りの月かげあ

はれに見し乳母も、三月ついたちに亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。いみじく泣きくらして見いだしたれば、夕日のいとはなやかにさしたるに、桜の花ののこりなく散りみだる。

散る花もまた来む春は見もやせむやがて別れし人ぞこひしき

(二九六頁)

さて、梅の花が咲いても継母が帰って来なかった、同じ年の春に、今度は乳母が亡くなったことが語られる。ずつと「物語」を求めていた孝標女が「物語のゆかしさもおぼえずなりぬ」というのだから、その嘆きは相当なものだろう。

また聞けば、侍従の大納言の御むすめ亡くなりたまひぬなり。殿の中將のおぼし嘆くなるさま、わがものの悲しきをりなれば、いみじくあはれなりと聞く。上り着きたりし時、「これ手本にせよ」とて、この姫君の御手をとらせたりしを、「さよふけてねざめざりせば」など書いて、「鳥辺山たにに煙のもえ立てばはかなく見えしわれと知らなむ」と、いひ知らずをかしげに、めでたく書きたまへるを見て、いとど涙を添へまざる。

(二九六〜二九七頁)

また、同じころ、藤原行成女も亡くなったと聞く。上京したとき手本を受け取っており、孝標女と交流があったのである。親

しくしていた人の相つぐ死が語られるのだ。

この乳母と行成女の二人の死が語られた直後に、次に挙げる有名な場面が語られる。

かくのみ思ひくんじたるを、心もなぐさめむと、心苦しがりて、母、物語などもとめて見せたまふに、げにおのづからなぐさみゆく。紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆれど、人かたらひなどもえせず。たれもいまだ都なれぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるまに、「この源氏の物語、一の巻とりしてみな見せたまへ」と心のうちにいのる。親の太秦にこもりたまへるにも、ことごとなくこのことを申して、出でむまにこの物語見はてむと思へど見えず。いとくちをしく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所にわたいたれば、「いとうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、かへるに、「何をかたてまつらむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得てかへる心地のうれしさぞいみじきや。はしるはしるわづかに見つ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちにうち臥して、引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。

(二九七〜二九九頁)

とうとう源氏物語を手に入れ、「はしるはしるわづかに見つ」と読みふける孝標女の様子が描かれる。この記事の直後の語りは「五月ついたちごろ」(注20)であり、源氏物語を手に入れるこの場面が四月である可能性もあるが、前の記事との連続を重視すれば、春の出来事だと捉えることができるだろう。

この春は孝標女にとって、継母との別れ、乳母と行成女の死、源氏物語との出会い、と特筆すべきことが盛りだくさんに起こった季節なのだった。なお、日記の中でこの春を思い出す場面がある。

花の咲き散るをりごとに、乳母亡くなりをりぞかし、とのみあはれるに、同じをり亡くなりたまひ侍従の大納言の御むすめの手を見つつ、すずろにあはれるに、五月ばかり、夜ふくるまで物語をよみて起きゐたれば、来つらむ方も見えぬに、猫のいとなごう鳴いたるを、おどろきて見れば、いみじうをかしげなる猫あり。

(三〇一頁)

これは、行成女の生まれ変わりとして、火事で焼け死ぬまで大切にされることになる猫の登場する場面である。「花の咲き散るをりごとに、乳母亡くなりをりぞかし、とのみあはれるに、同じをり亡くなりたまひ侍従の大納言の御むすめの手を見つつ」と、春が来るたびに乳母の死、そして行成女の死を思い出す。孝標女にとって春とこの二人の死は強い結びつきをもつものだということがうかがえよう。

六、『源氏物語』薄雲卷の春秋優劣論の枠組み

ここで、もう一度『源氏物語』薄雲卷の春秋優劣論を見てみたい。光源氏が斎宮女御に春と秋のどちらに心を寄せるのかと尋ねると、斎宮女御は次のように答える。

いと聞こえにくきことと思せど、むげに絶えて御答へ聞こえたまはざらんもうたてあれば、「ましていかと思ひ分きはべらむ。げにいつとなき中に、あやしと聞きし夕こそ、はかなく消えたまひにし露のよすがにも思ひたまへられぬべけれ」と、しどけなげにのたまひ消つまいとらうたげなるに、

(薄雲②四六二頁)

斎宮女御は自身の母、六条御息所が亡くなった季節であるということにかこつけて、秋を選択するのである。

これが『更級日記』にも受け継がれているといえよう。孝標女は春に乳母と行成女を亡くしているし、それを春になるたびに思い出している。だからこそ、春秋優劣論で春を選んだのだ。伊藤守幸氏は退けられたが、このとき、『栄花物語』あさみどり巻(注21)の次の歌が踏まえられていると見るべきだろう。長家との結婚に際し、行成女が詠んだ後朝の歌である。

x 浅緑空ものどけき春の日は暮るる久しきものとこそ聞け
姫君いと恥づかしと思したれど、なほ御手づからと思ひ

て、北の方せちにそそのかしきこえたまひければ、わりなけれど書きたまへるを、大殿御覧するに、いとど中納言の御手を若う書きなしたまへると見えて、えもいはずあはれに御覧せらる。

(あさみどり巻②一五〇頁)

たしかに、孝標女の詠んだA歌と詠みぶりは違っている。だが、『更級日記』中の行成女の死と春という季節の結びつきを考えると、このx歌を踏まえてA歌が作られたと考えたくなるのである。

七、資通の反応

孝標女が乳母と行成女を亡くした季節である故に春を選び、また「あさみどり」という語を詠みこんだならば、それに対して資通はどのように答えているのだろうか。資通が春秋優劣論を展開するとき、二度も登場するのが「ゆゑ」という語である。

唐土などにも、昔より春秋のさだめは、えしはべらざるを、このかうおぼしわかせたまひけむ御心ども、思ふに、ゆゑはべらむかし。わが心のなびき、そのをりの、あはれとも、をかしとも思ふことのあるとき、やがてそのをりの空のけしきも、月も花も、心にそめらるるにこそあべかめれ。春秋をしらせたまひけむことのふしなむ、いみじう承らまほしき。

(三三六頁)

おまへたちも、かならずさおぼすゆゑはべらむかし。

(三三七頁)

孝標女や他の女房に、どの季節を支持するにしても、その理由があるはずだと言うのである。この春秋優劣論において、どの季節を支持するにしても、理由が重要だと語られているとも言えよう。資通自身は冬の夜の月を支持する理由として、斎宮の装束の勅使として伊勢に下向した際のことを語る。

そもそも、和歌における春秋優劣論は基本的に誰にも共有される景物を詠みこむことで成り立っている。『源氏物語』の春秋優劣論において、斎宮女御が秋を選び、それが光源氏に受け止められるのは、斎宮女御が自身の母六条御息所が亡くなったのが秋だと、理由を語るためだ。他方、『更級日記』の春秋優劣論において孝標女が春を選んだ理由は語られない。

しかしながら、資通が詠んだB歌「今宵より後の命のもしもあらばさは春の夜をかたみと思はむ」について、伊藤守幸氏は次のように指摘する。

この場面には、孝標女の歌に対する資通の感動は、「かへすがへすうち誦じ」という形で明記されているものの、資通の歌に対する孝標女の思いは一切記されていない。しかし、人の世のはかなさに対する鋭敏すぎるほどの感受性の持ち主である孝標女が、この歌に反応しないはずがない。『源氏物語』を踏まえた言動を重ねる資通に対して、孝標女は、知的興味と興奮をかき立てられていただろうが、この歌を目にした瞬間、

その興奮は、自分と心を同じくする者を見いだしたことに對する、深い驚きと喜びとへ変じたはずである。(注22)

孝標女の側からすれば、B歌は確かに感動に価するものであっただろう。筆者は資通がそれを意図してB歌を詠んだと考える。なぜなら、資通もx歌を知っていたからである。津本信博氏は次のように指摘する。

『権記』には、(中略)孝標女の夫になった橘俊通の叔母にあたる橘徳子が従三位に叙せられたことや、孝標女が憧れたという異性・源資通の父である済政も同時に藏人に補されていること、さらに『枕草子』「うへにさぶらふ御猫は」の段に登場する藏人忠隆がやはり孝標と同時に藏人に補されていることなどが明らかにされるのである。(中略)

藏人の一員として資通の父・済政や、『枕草子』に登場する忠隆・道方とともに、藏人頭藤原行成のもとで無難にその任務を果たしていたようである。(注23)

つまり、行成は資通にとって父・済政の上司であった。このことは孝標女にとっても同じことが言え、行成は父・孝標の上司である。資通も行成女の死の知らせを聞いて、深く同情したのではないだろうか。

また、行成女の夫である長家と資通は、『榮花物語』によると治安三年(一〇二三)の土御門殿での歌会で同席している(注24)。これは行成女の死後であるが、長家と資通に親交があったと見て

も良いのではないだろうか。

以上のような人間関係から、資通がA歌の「あさみどり」からX歌を想起することもできるだろう。資通が行成女を想起して、「今宵より後の命のもしもあらば」とB歌を詠んだのではないだろう。だからこそ、孝標女の心を動かしたのである。

八、後日譚

いひて別れにし後は、たれと知られじと思ひしを、またの年の八月に、内裏へ入らせたまふに、夜もすがら殿上にて御遊びありけるに、この人のさぶらひけるも知らず、その夜はしにも明かして、細殿の遣戸を押しあけて見出したれば、暁がたの月の、あるかなきかにをかしきを見るに、沓の声聞こえて、読経などする人もあり。読経の人は、この遣戸口に立ちとまりて、ものなどいふにこたへたれば、ふと思ひ出でて、「時雨の夜こそ、かた時忘れず恋しくはべれ」といふに、ことながうこたふべきほどならねば、

D 何さまで思ひ出でけむなほざりの木の葉にかけし時

雨ばかりを

ともいひやらぬを、人々また来あへば、やがてすべり入りて、その夜さり、まかでにしかば、もろともなりし人たづねて、返ししたりしなものちにぞ聞く。「ありし時雨のやうならむに、いかで琵琶の音のおぼゆるかぎり弾きて聞かせむとなむある」と聞くに、ゆかしくて、われもさるべきをりを待つに、さらになし。

(三三七～三三八頁)

次の年の八月に、資通がやってくる。孝標女はD歌を贈るが、人目を気にしてほとんど話すこともなく退出してしまう。返事は朋輩の女房から後に聞いたと語られるが、その内容は語られない。また、孝標女は資通の弾く琵琶を聞きたいと思うが、そのような機会はまったく訪れない。

春ごろ、のどやかなる夕つかた、参りたなりと聞きて、その夜もろともなりし人と、あざり出づるに、外に人々参り、内にも例の人々あれば、出でさいて入りぬ。あの人もさや思ひけむ、しめやかなる夕暮を、おしはかりて参り参りたりけるに、騒がしかりければまかづめり。

E かしまみて鳴戸の浦にこがれ出づる心は得きや磯のあま
人

とばかりにてやみにけり。あの人がらも、いとすくよかに、世のつねならぬ人にて、「その人は、かの人は」なども、たづね問はで過ぎぬ。

(三三八～三三九頁)

これは、その後の春のことである。また資通がやって来て、孝標女が歌を詠む。しかし、ここでの資通の描写は推測が多いことに気づく。「あの人もさや思ひけむ」「まかづめり」などがそれである。孝標女を氣遣った行動のように語られているが、そうではないのかもしれない。一度A歌・B歌の贈答で心が通じ合った孝

標女と資通であつたが、結局はその関係は発展することもないのである。

九、おわりに

『更級日記』の春秋優劣論は以前から『源氏物語』の影響が指摘されてきた。『源氏物語』では、斎宮女御が自らの母・六条御息所の死を理由に秋を支持する。これが『更級日記』にも受け継がれているといえよう。孝標女は乳母と行成女の死が春であつたことから春を支持するのではないだろうか。そして、それは孝標女が「あさみどり」を詠みこむことによつて、行成女の死を知る資通に伝わつたのだろう。「今宵より後の命のもしあらば」という歌を孝標女に返すのである。

注

- (1) 『更級日記』本文・頁数は『新編日本古典文学全集 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（小学館）による。以下、『更級日記』の引用は本書による。

(2) 三三三頁。

- (3) 『新編日本古典文学全集 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（小学館）三三五頁頭注二〇による。

- (4) 山本浩子『「更級日記」「春秋のさだめ」と「枕草子」』（『解釈学』一五号 一九九五年一一月）。

- (5) 犬養廉「孝標女の歌稿——歌集の存否を中心に——」（『立正大学国語国文』二五号 一九八九年三月）。これは、犬養氏の旧稿である「更級日記臆断」（『国語国文研究』一七号 一九六一年）、「家集と日記——更級日記の場合——」（『中央大学国文』一九七〇年）を修正したものである。

- (6) 本論文中では触れられなかったが、和田律子「宮仕えの記——物語の男君——」（『藤原頼道の文化世界と更級日記』新典社二〇〇八年）では、資通を『源氏物語』の薫や藤原頼通と重ねて論じており、興味深い。

- (7) 『更級日記』中には源資通の名は出てこない。「御物本傍注」によれば、この参上した人物は源資通と知られる。（『新編日本古典文学全集 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（小学館）三三三頁頭注二三）と指摘されており、これが通説である。

(8) 三三三頁。

- (9) 「春秋に思みだれて分きかねつ時につけつゝ移る心は」（拾遺集・巻九・雑下・五〇九・ある所に、春秋いづれかまざると、問はせ給けるに、詠みて奉りける・紀貫之）や、「おもしろきことは春秋分きがたしたをりふしの心なるべし」（論春秋歌合・一一・みつね判す）などのように、優る季節はその時々によるものだという把握があつた。

- (10) 倉田実「源氏物語「雪の光」の表現性」（『昭和学院短期大学紀要』二四号 一九八八年）によれば、『源氏物語』中に「雪の光」は七例見られる。

- (11) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）。なお、『源氏物語』本文は以下これによる。

(12) 倉田実「源氏物語『雪の光』の表現性」〔昭和学院短期大学紀要』二四号 一九八八年〕。

(13) 中嶋朋恵「春秋優劣論と冬の月」〔東京成徳短期大学紀要』一七号 一九八四年三月〕。

(14) 中嶋朋恵「春秋優劣論と冬の月」〔東京成徳短期大学紀要』一七号 一九八四年三月〕。

(15) 本橋裕美「『源氏物語』における春秋優劣論の展開―秋好中宮の役割と関連して―」〔学芸古典文学』一号 二〇〇八年〕。

(16) 当時、藏人右兵衛佐だった資通が勅使として伊勢に発向したのは万寿二年（一〇二五）十一月二十日、斎宮の装着は十二月五日に行われた（経頼卿記）。〔新編日本古典文学全集 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（小学館）三三六頁頭注二二）と指摘されている。

(17) 岡部すみれ「『更級日記』「あさみどり」歌に関する一考察―孝標女の和歌の詠作と心象風景―」〔日記文学研究誌』二号 二〇〇〇年〕。「中略」は筆者による。

(18) 川村晃生「浅みどり花もひとつに」〔銀杏鳥歌』一〇号 一九九三年六月〕。「中略」は筆者による。

(19) 伊藤守幸「『更級日記』の「あさみどり……」詠に関する考察―色彩表現の意味と『源氏物語』の影響を中心に」（永井和子編『源氏物語へ 源氏物語から』笠間書院 二〇〇七年）。

(20) 二九九頁。

(21) 本文は『新編日本古典文学全集 栄花物語』（小学館）による。

(22) 伊藤守幸「『更級日記』の「あさみどり……」詠に関する考察―色彩表現の意味と『源氏物語』の影響を中心に」（永井和

子編『源氏物語へ 源氏物語から』笠間書院 二〇〇七年）。

(23) 津本信博「菅原孝標女とその周辺の人々」〔更級日記の研究』早稲田大学出版部 一九八二年〕。

(24) 御裳ぎ巻②三五二頁―三五七頁。

（しまもと・あや／東京学芸大学大学院修士課程）